

性別と男女平等主義的態度がジェンダーステレオタイプ活性におよぼす影響

野寺 綾 (s030312d@mbox.nagoya-u.ac.jp)

唐沢 かおり

[名古屋大学]

Effects of the gender and gender egalitarianism on male and female stereotype-activation

Aya Nodera, Kaori Karasawa

Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University, Japan

Abstract

The purpose of this study was to examine the impact of explicit attitudes toward gender roles and gender of participants on male and female stereotype-activation. Twenty-seven male and female students were participated in the experiment that measured the gender stereotype-activation by a sequential priming task. Following presenting a photograph of a male or female face, a target word was presented. Target words were consisted of negative male/female stereotypical words, positive male/female stereotypical words and the words unrelated to gender stereotypes. Reaction time for the lexical decision of the targets was measured. Then, explicit attitudes toward gender roles were measured by a questionnaire. The results showed that both male and female participants activated negative male and female stereotypes regardless of the explicit attitudes toward gender roles. These results are consistent with the previous studies arguing the difference between stereotype-activation and stereotype-application. The discussion argued that the negative stereotype-activation of both outgroup and ingroup in terms of gender might be governed by the psychological process that also leads to negativity bias.

Key words

stereotype-activation, gender stereotypes, self-protective motive, negativity bias

1. 目的

ステレオタイプとは任意の社会集団の成員がもつ特徴（性格特性、能力、身体的特徴等）について過度に一般化された知識のことを言う。「黒人は暴力的」、「女性は感情的」といった知識がステレオタイプに相当する。ステレオタイプが社会心理学の領域において古くから研究対象とされてきたのは、それが他者に対する判断や行動に大きく影響するからである。例えば未知の人物の印象形成 (Darley & Gross, 1983)、面接時の被面接者に対する振る舞い（身体的距離やアイコンタクトの数等: Word, Zanna, & Cooper, 1974）におけるステレオタイプの影響がこれまでに示されている。ステレオタイプを利用した判断は、相手について深く考えずとも少ない情報で効率よく判断を下すことが可能となるという点で、相手に関して自分が知っている情報が限られている場合や即断が要求される場合に有効な判断方略だと言える。しかしながらその一方で、ステレオタイプの反応は偏見や差別という大きな社会問題の原因となりうる。近年、ステレオタイプが我々の社会生活に対して持つネガティブな影響が一般にも知られるようになった (Operario & Fiske, 2004)。それに伴い教育制度や法制度の改変が行われ、平等主義が人々の間に浸透しつつある。しかし未だに偏見や差別に関する問題が存在するのも事実で

ある（例えば男女の雇用格差の問題については Lyness & Judiesch, 1999 を参照）。

偏見や差別が根強く残っている原因については、反応の意識的統制可能性という観点から解釈が可能である (Devine, 1989; Bargh, 1999)。Devine (1989) は、ステレオタイプの判断・行動に対する影響を活性と適用の2段階に分ける見方を提案した。活性と適用の主な違いは、意識的にステレオタイプの影響を統制できるか否かにある。適用の場合、人は自分がステレオタイプを想起していることを認識し、個人的ないし社会的な基準を犯さないように判断や行動に対するステレオタイプの影響を意識的に統制できる。従ってこの段階での反応は、判断の対象となる人物に出会ってから生起するまでの間に比較的時間を要する。従来の研究が測定してきた質問紙法の回答は適用段階での反応といえる。他方、活性とは、対象に出会った直後（1秒以内）急速にステレオタイプが想起しやすくなる現象を言う (Kawakami, Dion, & Dovidio, 1998)。あまりに素早いため、本人も活性に至る過程を意識することができない。従って活性の場合は適用と異なり、過程の進行を止められないばかりか自分がステレオタイプ活性状態になったということさえ意識できない場合もある。文化的背景を同じくする者は、同じステレオタイプを、ステレオタイプに反する信念をもつようになる前の比較的若い段階に獲得する (Devine, 1989; Monteith & Voils, 2001)。我々は、平等主義的信念をもつことにより判断や行動に対するステレオタイプの影響を避けることが可能となるが、それは適用レベル

での反応修正であり、活性レベルでの反応が未だステレオタイプ化している可能性は高い。例えば人種差別に対して反対意見を表明している人であっても、黒人に出会った直後に、怖いと感じたり、「暴力的」というステレオタイプの特徴を想起しやすくなったりすることの回避が困難であるのは、ステレオタイプ活性が意識的に統制できないからだとして解釈される。ステレオタイプ活性は、いつの間にか身につけた悪習慣に例えられることが多く、これを断つためにステレオタイプの知識の構造自体を修正するには、時間をかけ繰り返し新しい知識を学習することが必要だとされている (Bargh, 1999; Devine, 1989; Kawakami et al., 1998)。

ステレオタイプ活性という概念の登場以降、活性過程解明の試みが多くなされてきた。まずステレオタイプ活性の測定方法の開発が進んだ。閼上・閼下プライミングの他、ストループ課題や IAT (Implicit Association Test) 等の開発が進んでおり、現在もそれらの尺度の信頼性や妥当性が検証されている (Fazio, Jackson, Dunton, & Williams, 1995; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; Kawakami & Dovidio, 2001)。また活性に影響する要因の同定を試みる研究も行われている。人種ステレオタイプに関しては、参加者の人種 (Fazio, et al., 1995) や自尊感情の状態 (Sinclair & Kunda, 1999) が人種ステレオタイプ活性の強さに影響するという知見がある。さらに、ステレオタイプ活性と適用に関与する脳器官が異なるとする生理心理学的知見も提出されている (Ito & Cacioppo, 2001)。その一方で、そもそも表明している信念の表明とステレオタイプ活性の内容の乖離自体に懐疑的な見方も存在する (Lepore & Brown, 1997)。いずれにせよステレオタイプ活性という概念は現在大きく注目されている検討課題だと言ってよい (Monteith & Voils, 2001)。

ところで、上述の知見のほとんどは、人種ステレオタイプを題材にした研究によるものであるが、本研究は人種ではなくジェンダーステレオタイプを題材とする。ジェンダーステレオタイプには人種や年齢等のステレオタイプとは異なった特徴がある。Fiske & Stevence (1993) は、ジェンダーステレオタイプの特徴として、男女各々のあるべき姿を描いていること、ステレオタイプの表明に対する規範的圧力が低いこと、また特に女性ステレオタイプは慈善的側面の強いものが多いこと (女性は助けられ、守られる存在である等) を指摘している。これらは、ジェンダーステレオタイプが他のステレオタイプよりも発達・維持されやすく、ジェンダーステレオタイプに従った反応を自己制御する意図がそがれやすい状況を示唆している (Monteith & Voils, 2001)。人種ステレオタイプを題材にした研究知見は、他のステレオタイプを扱った場合にも追認できると考えられるが、ジェンダーステレオタイプが持つこのような特徴を考えると、人種ステレオタイプで検討されている要因をジェンダーステレオタイプにおいても検討する意義は十分にあると考えられる。そこで本研究では、実験参加者が表明している男女平等主義的態度と性別を取り上げ、これら2つの要因がジェンダーステレオタイプ活性に対して

もつ影響を検討する。

人種ステレオタイプを題材にした先行研究において、顕在的な平等主義的態度という要因を検討した研究は多いが、人種という要因に関してはあまり検討がなされていない。例外的に Fazio et al. (1995) は、アメリカに在住する白人と黒人の学生を参加者とし、プライミングパラダイムによる課題で人種ステレオタイプの活性を測定している。実験の結果、白人学生では黒人の顔写真をプライムした後にはネガティブ語に対する反応が促進され、白人の顔写真提示後にはポジティブ語への反応が速くなった。しかし、黒人学生の場合はこうした活性は確認できなかった。むしろ、白人顔プライム後のネガティブ語に対する反応と、黒人顔プライム後のポジティブ語への反応が促進された。この結果は、Devine (1989) らが主張する文化的背景と、Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Rosier (2000) が主張する自尊感情の維持による説明が可能であろう。前者からは、黒人と白人は異なる文化的背景を有するために、両参加者は異なる活性パターンを示したと考えられる。また、自尊感情を維持するために所属集団とポジティブな評価性が連合した知識構造を有しているという仮定からは、黒人学生においては黒人カテゴリとのポジティブな評価性の連合が存在するため、黒人に対してネガティブな反応が抑制されたと考えられる (Greenwald et al., 2000)。しかし、ジェンダーステレオタイプ活性における参加者の性別に関しては、人種とは事情が異なる。本研究の参加者は日本人学生であり、同じ文化的背景をもち同じステレオタイプの知識を有すると考えられる。従って男女共に同じジェンダーステレオタイプを活性させる可能性がある。その一方、自尊感情をポジティブに保つためには、自分の所属するジェンダーカテゴリのポジティブステレオタイプを活性し、相手集団に対してはよりネガティブなステレオタイプを活性しやすくなっているかもしれない。このようにジェンダーステレオタイプの活性に関しては、人種とは異なる予測が成り立つため、ステレオタイプ活性に関する基礎的知見を得るという点でも、これらの要因をジェンダーステレオタイプにおいて検討する意義は高いといえるだろう。

2. 方法

2.1 参加者

参加者は日本人の男女学部学生および大学院生27名 (男性12名、女性15名) であり、平均年齢は21歳 (SD=3) であった。

2.2 実験刺激

ジェンダーステレオタイプ語を抽出するために、男女学部学生177名を対象に予備調査を実施した。被調査者に対して男女のイメージに関する調査と銘打った108語からなる単語リストを提示し、各語が男性もしくは女性の良い側面ないしは悪い側面、良くも悪くもない側面のいずれをあらわすかを回答させた。その結果7割以上の支持が得られ

た単語を、ジェンダーステレオタイプ語とみなした。実験で使用したのは、男性のポジティブステレオタイプ語15語(たくましい・有能・勇敢・責任感・頼りがい・行動力・強い・信念・スポーツ・運転能力・情熱的・働き手・リーダーシップ・気前よい・かつこいい)、ネガティブステレオタイプ語15語(しつこい・だらしない・いい加減・ふてぶてしい・無責任・遊び人・暴力的・無神経・浮気・冷たい・セクハラ・理屈屋・腹黒い・横柄・がさつ)、女性のポジティブステレオタイプ語15語(家庭的・華やか・かわいい・可憐・料理・清纯・母性・おしとやか・やわらかい・きれい・おだやか・色気・美しい・純真・いじらしい)、ネガティブステレオタイプ語15語(うるさい・甘え・ふしだら・泣き落とし・ずるい・ヒステリック・依存的・嫉妬・打算的・あばずれ・したたか・水商売・ブタ・たまのこし・売春)であった。また、男女学部学生の顔写真(カラー)を各15枚を用意した。写真の大きさは縦横7×8.5cmの長方形とし、背景は単語提示時の背景色に合わせて白に加工した。

2.3 手続き

参加者を個別に実験室に呼び、Fazio et al. (1995) および Wittenbrink, Judd, & Park (2001) が実施しているプライミング課題の手続きを参考に、ジェンダーステレオタイプの活性の程度を測定した。なお、参加者には実験開始前に、これは人間の認知機能に関する実験であり、特に単語の認識力と顔の記憶力の検討を目的としていると教示した。この教示によって課題がジェンダーステレオタイプに関連するものだという点を悟られないようにした。

語彙判断課題(ベースラインの測定): ジェンダーステレオタイプ語を単独で提示した際の語彙判断課題に要した反応時間を測定した。コンピュータ画面上に凝視点を2秒間提示した後、空白を50秒間おいて、文字のつづりを提示した。試行間隔は1秒であった。参加者の課題はこのつづりが意味のある単語か無意味つづりかを判断し、キイ押し回答することであり、判断に要した時間が記録された。反応キイにはキイボックスを使用し、使用するキイの位置についてはカウンターバランスをとった。判断対象となった文字のつづりは女性のネガティブステレオタイプ語5語、ポジティブステレオタイプ語5語の他、男性のネガティブステレオタイプ語5語、ポジティブステレオタイプ語5語を含んでいた。この20試行での反応時間を各ジェンダーステレオタイプ語に対するベースラインとみなし、後の分析で使用した。提示される各ステレオタイプ語が異なっているスクリプトは2種用意された。いずれも総試行数は100試行であるが、そのうち単語が提示される試行数は50であった。このうちジェンダーステレオタイプ語以外の語については、ジェンダーステレオタイプとは無関係な語を用いた。実験スクリプトは5つのブロックからなり、各ブロックに無意味つづりを判断させる試行を10試行、単語を判断させる試行を10試行配した。単語判断試行10のうち4試行がベースラインを測定するための試行になるようにし

た。また被験者ごとに各ブロックの試行提示順序をランダム化した。参加者の疲労を軽減し課題への集中力を持続させるために、第2ブロック終了後に一度休憩を入れ、数秒後に課題を再開した。なお本試行実施前に10試行の練習試行を実施した。練習試行で用いた刺激は本試行の刺激と異なるものとし、ジェンダーステレオタイプとは無関係な単語を使用した。練習試行の後、できるだけ速く正確にキイ押し回答するように教示し、本試行を開始した。

顔の学習課題と再認課題: 語彙判断課題に続いて、顔の学習と再認課題を実施した。これは実験意図を悟られないように挿入した課題である。参加者には、後で再認課題を実施するのでコンピュータ画面に提示される顔写真を覚えるようにと教示した。顔写真は、凝視点を2秒提示後、250ms提示し、試行間隔は1秒とした。使用した顔写真は男女各5枚であり、各写真を5回繰り返し提示した。続いて学習課題で提示した顔写真10枚と提示しなかった顔写真10枚(男女各5枚)を使って、再認課題を実施した。参加者の課題は学習課題で提示された写真かどうかをキイ押し回答することであった。

顔の学習課題と語彙判断課題の組み合わせ課題(活性測定): 顔学習課題と語彙判断課題の組み合わせ課題と称して、プライミングパラダイムによるジェンダーステレオタイプ活性の測定を試みた。凝視点を2秒間提示した後、顔写真(プライム)を250ms間提示し、空白を50msおいてから文字のつづり(ターゲット)を提示し、この文字つづりの語彙判断に要した時間を記録した。反応にはキイボックスを使用し、キイの位置についてはカウンターバランスをとった。試行間隔は1秒である。使用した顔写真は男女各5枚であった。ターゲット語は、女性のネガティブステレオタイプ語10語、ポジティブステレオタイプ語10語の他、男性のネガティブステレオタイプ語10語、ポジティブステレオタイプ語10語の計40語を含んでいた。顔写真とステレオタイプ語についてはともに、ベースライン測定および顔学習・再認課題時に利用した刺激との重複はなかった。これは、結果に反復プライミングの効果が現れるのを避けるためである。組み合わせ課題に関しても実験スクリプトを2種用意した。総試行数は180試行であり、うち90試行で単語を提示した。ジェンダーステレオタイプ語を提示する40試行以外の試行で用いた単語は、ジェンダーステレオタイプとは無関係な語とした。実験スクリプトは10ブロックからなり、1ブロックは18試行で構成されていた。そのうち単語を提示する試行は9であり、これはジェンダーステレオタイプ語を提示する5試行を含んでいた。試行提示順序は参加者ごとランダムにした。また第3ブロックおよび第7ブロック終了後に数秒の休憩をはさんだ。

顕在的に表明している男女平等主義的態度の測定: 組み合わせ課題終了後、顔の再認課題の前に時間をおきたいので別な研究者が実施している質問紙を実施すると教示した。実施したのは平等主義的性役割態度スケール短縮版(鈴木, 1994)であった。質問紙回答終了後に実験がこれで終わりである旨を告げ、実験意図に対する気づきと実験の

感想、提示された顔写真に知っている顔があったかを尋ね、デブリーフィングをして実験終了とした。

3. 結果

ジェンダーステレオタイプの活性量の指標として、男女ステレオタイプ語のみを提示したときのベースライン反応時間から、プライムである女性または男性の顔写真を提示した後の女性（男性）ステレオタイプ語に対する反応時間を減算した反応促進量を算出した (Fazio et al., 1995)。ベースライン課題においてジェンダーステレオタイプ語の判断に要した時間を、ジェンダーの種類ごとに平均した。組み合わせ課題の反応時間については、顔写真×ステレオタイプ語の各々において平均値を算出し、ベースライン課題の各平均値からこの値を減算した。各反応促進量は各ステレオタイプの活性の強さ反映している。例えばもし女性ポジティブステレオタイプ語の促進量が男性顔提示時よりも女性顔提示時で大きいのなら、ポジティブな女性ステレオタイプが活性していると解釈できる。また、全参加者の平等主義的性役割態度スケールの結果から得点の中央値（71点）を算出して全参加者を平等主義高群と低群に分割し、これを参加者が顕在的に表明している男女平等主義的態度の要因として後の分析に使用した。なお平等主義低群は13名（うち女性6名）、平等主義高群は14名（うち女性9名）であった。

反応促進量を従属変数として、参加者の性別（2）×平等主義的態度（2）×顔写真（2）×ステレオタイプ語（4）の4要因分散分析を実施したところ（顔写真とステレオタイプ語の要因は被験者内配置である）、顔写真×ステレオタイプ語の交互作用が有意となった ($F(4,92) = 12.79, p < .01$)。さらに単純主効果検定を実施した結果、女性のネガティブなステレオタイプ語については、女性顔を提示した場合の方が男性顔を提示した場合よりも反応が促進され ($F(1,26) = 12.75, p < .01$)、男性のネガティブステレオタイプ語に関しては、男性顔を提示した場合の方が女性顔を提示した場合よりも反応が促進されることが示された ($F(1,26) = 24.16, p < .01$)。この結果は、参加者の性別や平等主義的態度によらず男性・女性ステレオタイプの両方でネガ

ティブな内容が活性しやすい状態にあったことを示唆している（図1参照）。

4. 考察

本研究の目的はジェンダーステレオタイプの活性が参加者の性別と顕在的に表明している平等主義的態度の影響を受けるか否かを検討することであった。実験の結果、男女共にネガティブなジェンダーステレオタイプを活性しやすいこと、こうした活性は表明している男女平等主義的態度の強さによらず生じることが明らかになった。

意識的な平等主義的態度の表明と活性とが別過程である点は、人種ステレオタイプを題材にした Devine (1989) や Fazio et al. (1995) の研究知見と一致する。ただし、Lepore & Brown (1997) は、顕在的態度の程度によって人種ステレオタイプ活性の程度が異なる点を示し、低偏見者と高偏見者では黒人に関する表象そのものが異なっていると主張した。人種ステレオタイプ活性に対する顕在的態度の影響がこのような不一致を示した点については様々な議論がなされているが（例えば Devine, Plant, Amodio, Harmon-Jones, & Vance, 2002）、ジェンダーを扱った本研究の結果には、Fiske & Stevence (1993) が指摘したジェンダーステレオタイプの特異性が関与していると考えられる。即ちジェンダーステレオタイプは、人種ステレオタイプに比べて制御しようという個人的な動機づけ、あるいは制御しようという社会的要請の程度が弱く、顕在的に表明している偏見の程度とステレオタイプに関する知識の間に差異が生じやすかったと推測できる。

また本研究では、参加者の性別によらずネガティブなジェンダーステレオタイプが活性しやすい状態にあることが示された。分散分析の結果、性別の要因については主効果および交互作用ともに有意でなかったことから、女性も男性と同じく女性のネガティブステレオタイプを活性しやすく、また男性も女性と同じく男性のネガティブステレオタイプを活性しやすかったと言える。本研究の場合、参加者は同じ大学に所属する日本人学生であり、文化的背景に大きな差異があるとは考えられない。従って Devine (1989) が指摘している文化差の効果は働いておらず、男女は同一の活性パターンを示したと考えられる。また、自尊感情維持のために人種上の外集団をネガティブステレオタイプ化することは活性レベルでも検証されており (Spencer, Fein, Wolf, Fong, & Dunn, 1998)、外集団成員のステレオタイプ化に関しては本研究でも類似した結果が得られたと言える。しかし、自己が所属する集団のネガティブステレオタイプが活性したという結果は、自尊感情維持という観点からは説明が困難である。人種ステレオタイプ活性を指標とした Fazio et al. (1995) では、自分が所属するカテゴリに対してポジティブな評価的反応が得られたが、本研究ではそのような傾向は確認できなかった。

なぜ、男女ともにジェンダーに関する内集団のネガティブ属性を活性しやすかったのだろうか。この結果は、ネガティブバイアスとの関連が指摘できよう。ネガティブ

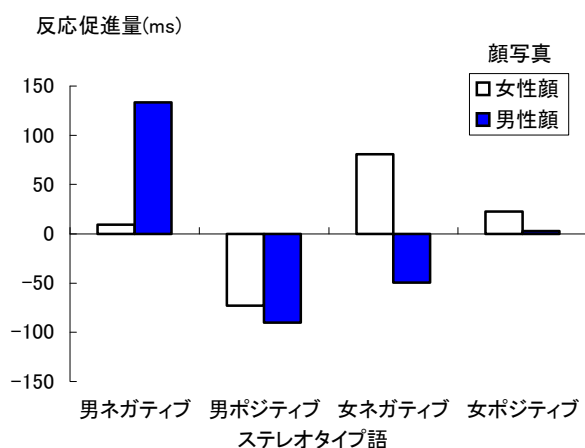


図1: 顔写真×ステレオタイプ語の交互作用

ティバイアスとは、評価的にポジティブな情報よりもネガティブな情報の方が我々の判断に強く影響するという情報処理の傾向を言う。例えば印象形成においては対象に関するネガティブな情報がより大きな影響を与えることが知られている (Fiske, 1980)。自己ステレオタイプ化において、ネガティブバイアスが生じる点を活性レベルで示した研究はほとんどないが、事象関連電位 (ERP) を従属変数としている研究は、ネガティブバイアスが情報処理の初期段階で成立する点を検証しており (Ito & Cacioppo, 2001)、本研究結果をネガティブバイアスで説明する際の支持的データと見なすことができるだろう。しかしこの点については今後の研究で更なる検討を加える必要がある。

さらに自己ステレオタイプ化の結果に関する今後の研究では、自尊感情の維持が活性に及ぼす影響について考慮する必要もあるだろう。Greenwald et al. (2000) は、自尊感情の維持を知識構造のレベルで説明したが、ステレオタイプが機能するレベルでも自尊感情が維持される可能性を Sinclair & Kunda (1999) や Spencer, et al. (1998) は示している。彼らは実験的に操作された自尊感情維持動機の強さが、外集団成員の人種ステレオタイプの活性を導く点を検討している。特に Sinclair & Kunda (1999) は、自尊感情を維持している者は、外集団成員をポジティブなステレオタイプで捉えやすくなることを示している。こうした研究結果を考慮して自己ステレオタイプ化を捉えなおすと、ネガティブな自己ステレオタイプを活性させやすい人物であっても、自尊感情が低下している場合には、内集団のポジティブステレオタイプを活性するといった事態が予測できる。このように自己ステレオタイプ化に関しては、自尊感情の高低を状況要因として位置づけた研究が今後行われるべきであろう。

引用文献

- Bargh, J. A. 1999 The cognitive monster: The case against the controllability of automatic stereotype effects. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology* (pp. 361-382). NY: Guilford Press.
- Darley, J. M., & Gross, P. H. 1983 A hypothesis-confirming bias in labeling effects. *Journal of Personality & Social Psychology*, 44, 20-33.
- Devine, P. 1989 Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality & Social Psychology*, 56, 5-18.
- Devine, P., Plant, E. A., Amodio, D. M., Harmon-Jones, E., & Vance, S. L. 2002 The regulation of explicit and implicit race bias: The role of motivations to respond without prejudice. *Journal of Personality & Social Psychology*, 82, 835-848.
- Fazio, R. H., Jackson, J. R., Dunton, B. C., & Williams, C. J. 1995 Variability in automatic activation as an unobtrusive measure of racial attitudes: A bona fide pipeline? *Journal of Personality & Social Psychology*, 69, 1013-1027.
- Fiske, S. T. 1980 Attention and weight in person perception: The impact of negative and extreme information. *Journal of Personality & Social Psychology*, 38, 889-906.
- Fiske, S. T., & Stevence, L. E. 1993 What's so special about sex?: Gender stereotyping and discrimination. In S. Oskamp & M. Costanzo (Eds.), *Gender issues in contemporary society: Claremont symposium on applied social psychology 6* (pp. 173-196). Thousand Oakesm CA: Stage Publications, Inc.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. 1998 Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D. Nosek, B. A., & Rosier, M. 2000 Prologue to a unified theory of attitudes, stereotypes, and self-concept. In J. F. Forgas (Ed.), *Feeling and thinking: The role of affect in social cognition* (pp. 308-330). Cambridge: Cambridge University Press.
- Ito, T. A., & Cacioppo, J. T. 2001 Affect and attitudes: A social neuroscience approach. In J. P. Forgas (Ed.), *Handbook of affect & social cognition* (pp. 319-343). Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Kawakami, K., & Dovidio, J. F. 2001 The reliability of implicit stereotyping. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 212-255.
- Kawakami, K., Dion, K. L., & Dovidio, J. F. 1998 Racial prejudice and stereotype activation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 407-416.
- Lepore, L., & Brown, R. 1997 Category and stereotype activation: Is prejudice inevitable? *Journal of Personality & Social Psychology*, 72, 275-287.
- Lyness, K. S., & Judiesch, M. K. 1999 Are women more likely to be hired or promoted into management positions? *Journal of Vocational Behavior*, 54, 158-173.
- Monteith, M. J., & Voils, C. I. 2001 Exerting control over prejudice responses. In G. B. Moskowitz (Ed.), *Cognitive social psychology: The princeton symposium on the legacy and future of social psychology* (pp. 375-388). NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Operario, D., & Fiske, S. T. 2004 Stereotypes: Content, structures, processes and context. In M. B. Brewer & M. Hewstone (Eds.), *Perspectives on social psychology: Social cognition* (pp. 120-141). Malden, MA: Blackwell Pub.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. 1999 Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality & Social Psychology*, 77, 885-904.
- Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C. T., Fong, C., & Dunn, M. A. 1998 Automatic activation of stereotypes: The role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1139-1152.
- 鈴木淳子 1994 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S)の作成 心理学研究、65、34-41

Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. 2001 Spontaneous prejudice in context: Variability in automatically activated attitudes. *Journal of Personality & Social Psychology*, 81, 815-827.

Word, C. O., Zanna, M. P., & Cooper, J. 1974 The nonverbal mediation of self-fulfilling prophecies in interracial interaction. *Journal of Experimental Social Psychology*, 10, 109-120.

(受稿 : 2004 年 10 月 10 日 受理 : 2004 年 11 月 22 日)